

研究課題

外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成

副題

～英会話学習と英国の現地校との交流を結び付ける総合的な学習の時間の工夫を通して～

学校名

ロンドン日本人学校

所在地

87 CREFFIELD ROAD, ACTON, LONDON, W3 9PU, U.K.

ホームページ
アドレス

<http://www.thejapaneseschool.ltd.uk>

1. 研究の背景

本校では設立以来、学校目標である「たくましいロン日っ子、ロン日生(Strong and Healthy)」のもと、教育活動全般において国際理解教育を推進してきた。具体的には、本校が英国にあるという地理的条件を活かし、小・中学部全学年で英会話教師による習熟度別英会話授業や、英国の現地小中学校やフレンチ校、ジャーマン校などのナショナル校と年間約30回を数える交流などに取り組んできた。この交流活動は、本来英会話学習等の成果を発揮し、英語での実践的コミュニケーション能力を高めることができる場であり、お互いを理解し合い同じ人間としてのつながりをもつことができる場となりうるものである。

しかし、昨年度の交流活動後に実施した児童生徒アンケートによると、「楽しさ」に関しては来校89%、訪問96%と肯定的に捉える児童生徒が多い反面、「進んで話ができただか」については来校56%、訪問58%、「相手のことを理解できたか」については来校50%、訪問54%と肯定的に捉える児童生徒が決して多くないという結果を得た。また、昨年度の「学校評価」に係る保護者アンケートでは、子どもたちにさらなる英会話力が身に付くよう指導を強化してほしいという要望が多数寄せられた。

これらの現状から、英語での会話が成り立つために必要な基本的な会話力が不十分であることや、英会話教師と学年教員の連携不足などにより現地校との交流において英会話学習で学んだことを生かしきれていない、現地校交流で使う会話の練習が十分でないという本校の実態が明るみとなった。つまり、本校の実態に応じた英会話学習や現地校交流、そしてそれらを結ぶ総合的な学習の時間の在り方を見直し、本校における新たな国際理解教育の在り方を構築する必要が出てきた。

2. 研究の目的

本研究の目指すところは、文部科学省が国際理解教育として定義している「主体的に行動するために必要と考えられる資質・能力の基礎を育成することを目的とした教育活動の実践」であり、現地校との交流活動における「実践的コミュニケーション能力」の育成を目的としている。本研究では、この目的を達成するために必要不可欠な要素である英会話学習、現地校交流、総合的な学習の時間の有機的な連携の在り方とそれぞれの時間の効果的な運用を究明したいと考えた。

実践的コミュニケーション能力の定義

「話すこと」

英語を用いて自分の考えや思いを話すことができる。

「聞くこと」

英語を用いて話し手の意向などを理解することができる。

3. 研究の方法

- (1) 英会話学習【習得型学習】
 - ① 英会話学習年間指導計画の見直し
 - ② 現地校交流に必要な英語表現の精選
- (2) 現地校交流【探究型学習】
 - ① 各教科の学習を基にした学習内容・学習活動の精選
- (3) 総合的な学習の時間【活用型学習】
 - ① 実践的なコミュニケーション能力育成の時間の開発
- (4) 検証授業と事後研究会の実施
- (5) ICT機器の活用法の模索

4. 研究の内容・経過

(1) 英会話学習【習得型学習】

① 英会話学習年間指導計画の見直し

これまで現地校交流と英会話学習との間に結びつきがあまり見られなかった。そこで、今年度は現地校交流の活動において、英会話学習の成果を十分に発揮することができるよう、英会話学習の年間指導計画に現地校交流に向けた準備の時間を予め設定することとする。

② 現地校交流に必要な英語表現の精選

研究部員が学年教員と英会話教師との調整を行い、両者の意向を組んだ上で当日の学習活動に即した英語表現を英会話の習熟度別に精選し、一覧にまとめることとする。また、現地校交流に向けた英会話学習の中で上記の英語表現の習得を目指した指導に当たる。

(2) 現地校交流【探究型学習】

① 各教科の学習を基にした学習内容・学習活動の精選

現地校交流当日の主たる学習活動の内容は、児童生徒が教科の中で学習するものであるとともに交流相手に伝えたいと思う内容を精選する。また、当日に児童生徒が取り組む学習活動は、用意したものを説明するだけでなく、交流校児童生徒と協同で行う活動を組み込み、コミュニケーションを図る必然性が出る場を意図的に設定する。

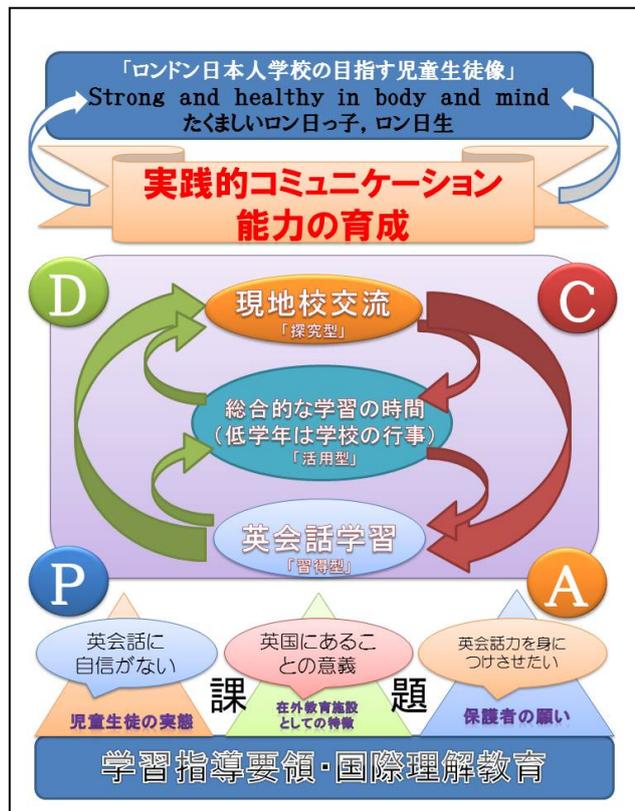
(3) 総合的な学習の時間【活用型学習】

① 実践的なコミュニケーション能力育成の時間の開発

総合的な学習の時間（低学年：学校の行事）を英会話学習と現地校交流を結び付ける実践的なコミュニケーション育成の時間と位置づけ、学習内容や学習活動の開発を行う。

(4) 検証授業と事後研究会の実施

研究部員による総合的な学習の時間の検証授業を年度内に3回実施する。検証授業の参観と事後



「研究イメージ図」

研究会の参加により部員以外にも研究の周知を図るとともに、総合的な学習の時間の運用方法を全教員で探っていく。また、ここで出た成果と課題を次の学年が交流計画を立案する際に反映させていく。

(5) ICT 機器の活用法の模索

上記の様々な学習場面において、ICT 機器の効果的な活用方法を探っていく。

5. 研究の成果

(1) 英会話学習【習得型学習】

現地校交流に必要な英語表現の精選

学年教員と英会話教師で当日の学習内容と学習活動に必要な英語表現について話し合いを行い、その後学年教員が基本的な英語表現を精選することとした。また、今年度の研究では現地校交流と英会話学習の連携を行い、より効果的な英会話学習を計画し展開するため、現地校交流に向けた英語表現習得の時間を英会話学習年間指導計画の中に位置付けた。時数としては、小学部では交流前4時間を、中学部では交流前3時間を設定した。

具体的には、現地校交流に向けた英会話学習の1時間目と4時間目（中学部は3時間目）を学年教員と英会話教師との共同授業と位置づけ、学年教員が主導する授業を実施した。1時間目には活動に必要な基本的な英語表現の習得を目的とし、4時間目では、英会話教師を交流校の児童生徒と見立てたりハーサルを行い、より実践的な英会話力の習得を目的として授業を展開した。また、2時間目、3時間目は英会話の習熟度に基づき設定した「段階別コミュニケーション能力の目標」に照らし合わせた英語表現の定着を図ったり、発展的な表現を学んだりする時間として英会話授業の展開を図った。これらの位置付けを明確にすることで、両者の連携が計画的に実施され、英会話学習の指導をより有機的に行うことができたと感じている。

grade	April	May	Jun	July	September	October	November	December	January	February	March
Sho1 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (11)	Unit 3 (10)	Unit 4 (8)	Unit 5 (10)	Unit 6 (11)	Unit 7 (17)	Unit 8 (9)	Unit 9 (7)	Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Sho2 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (11)	Unit 3 (10)	Unit 4 (8)	Unit 5 (10)	Unit 6 (11)	Unit 7 (13)	Unit 7 (4) Unit 8 (5)	Unit 8 (4) Unit 9 (3)	Unit 9 (4) Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Sho3 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (11)	Unit 3 (6)	Unit 3 (4) Unit 4 (4)	Unit 4 (4) Unit 5 (6)	Unit 5 (4) Unit 6 (7)	Unit 6 (4) Unit 7 (13)	Unit 7 (4) Unit 8 (5)	Unit 8 (4) Unit 9 (3)	Unit 9 (4) Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Sho4 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (11)	Unit 3 (10)	Unit 4 (8)	Unit 5 (10)	Unit 6 (11)	Unit 7 (17)	Unit 8 (9)	Unit 9 (7)	Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Sho5 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (7)	Unit 2 (4) Unit 3 (6)	Unit 3 (4) Unit 4 (4)	Unit 4 (4) Unit 5 (6)	Unit 5 (4) Unit 6 (7)	Unit 6 (4) Unit 7 (13)	Unit 7 (4) Unit 8 (5)	Unit 8 (4) Unit 9 (3)	Unit 9 (4) Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Sho6 (105)	Unit 1 (8)	Unit 2 (7)	Unit 2 (4) Unit 3 (6)	Unit 3 (4) Unit 4 (4)	Unit 4 (4) Unit 5 (6)	Unit 5 (4) Unit 6 (7)	Unit 6 (4) Unit 7 (13)	Unit 7 (4) Unit 8 (5)	Unit 8 (4) Unit 9 (3)	Unit 9 (4) Unit 10 (5)	Unit 10 (5)
Chu1 (70)	Unit 1 (6)	Unit 2 (6)	Unit 3 (6) Unit 4 (2)	Unit 4 (4) Unit 5 (3)	Unit 5 (3) Unit 6 (3)	Unit 6 (3) Unit 7 (1)	Unit 7 (5) Unit 8 (2)	Unit 8 (4) Unit 9 (2)	Unit 9 (4) Unit 10 (2)	Unit 10 (4) Unit 11 (2)	Unit 11 (5)
Chu2 (70)	Unit 1 (6)	Unit 2 (6)	Unit 3 (6) Unit 4 (2)	Unit 4 (4) Unit 5 (3)	Unit 5 (3) Unit 6 (3)	Unit 6 (3) Unit 7 (1)	Unit 7 (5) Unit 8 (2)	Unit 8 (4) Unit 9 (2)	Unit 9 (4) Unit 10 (2)	Unit 10 (4) Unit 11 (2)	Unit 11 (5)
Chu3 (70)	Unit 1 (6)	Unit 2 (6)	Unit 3 (6) Unit 4 (2)	Unit 4 (4) Unit 5 (3)	Unit 5 (3) Unit 6 (3)	Unit 6 (3) Unit 7 (1)	Unit 7 (5) Unit 8 (2)	Unit 8 (4) Unit 9 (2)	Unit 9 (4) Unit 10 (2)	Unit 10 (4) Unit 11 (2)	Unit 11 (5)

※開校日数：現地校交流準備期間（小学部1時間／中学部2時間）

小学部	① 3～4語の単語を合わせた文を読することができる。	② 5語以上の英文フレーズを読することができる。	③ 自分で文を構成し、読することができる。	④ 聞かれたことに適切に返信し、会話を続けることができる。	
小学部5年～6年	① 英文の単語を読することができる。	② 3～4語の英文フレーズを読することができる。	③ 5語以上の英文フレーズを読することができる。	④ 自分で文を構成し、読することができる。	⑤ 聞かれたことに適切に返信し、会話を続けることができる。
小学部3年～4年	① 英文の単語を読することができる。	② 3～4語の英文フレーズを読することができる。	③ 5語以上の英文フレーズを読することができる。	④ 聞かれたことに適切に返信し、会話を続けることができる。	
小学部1年～2年	① 英文の単語を読することができる。	② 3～4語の英文フレーズを読することができる。	③ 5語以上の英文フレーズを読することができる。	④ 聞かれたことに適切に返信し、会話を続けることができる。	
	E Class	D Class	C Class	B Class	A Class

「英会話学習年間指導計画一覧表」

「段階別コミュニケーション能力の目標」

(2) 現地校交流【探究型学習】

各教科の学習を基にした学習内容・学習活動の精選

当日の主たる活動内容は、「児童生徒が教科、領域の中で学習し興味・関心の高いものである」と共に、「交流相手に伝えたいと思う内容である」この2点について研究部員と学年教員で検討し決定した。またその際、本校の意向だけでなく、交流校の意向も踏まえて内容選定を行った。

例えば中学部2年では交流校であるキャンピオン校から日本語科に在籍している生徒が来校するため、来校生徒の関心が高い漢字についての内容を検討し、本校生徒の既習事項である国語科の「漢字の成り立ち」を発展させたものを学習内容とした。

また、小学部5年では各国の食料問題に関わるグラフを作成した後、そのグラフから分かることをグループで考察したり、中学部3年では交流校の生徒の興味・関心を引き出しながら日本の旅行プランをプレゼンテーションソフトで作成したりするなど交流校の児童生徒と協同で行う学習活動を組み込んだ。つまり、用意したものを説明するだけでなく、コミュニケーションを図る必然性がある場を意図的に設定してきた。

これらの学習内容・学習活動を学年間の系統性に留意しながら整理しまとめることができたことは大きな成果である。

学年	関連教科・領域名	単元名
TEMZ学級	生活単元	ラジオ体操
小学部1年	図工科	つかってみようざいりょうどうぐ (クレヨン)
小学部2年	生活科	うごくうごくわたしのおもちゃ
小学部3年	総合	やさしさ発見
小学部4年	国語科	漢字の広場
小学部5年	社会科	わたしたちの生活と食料生産
小学部6年	体育科	組立体操
中学部1年	保健体育科	新体力テスト
中学部2年	国語科	漢字の成り立ち 説明の仕方を工夫しよう
中学部3年	社会科	わたしたちの国土

「学習内容・学習活動計画一覧表」

(3) 総合的な学習の時間【活用型学習】

実践的なコミュニケーション能力育成の時間の開発

今年度は、総合的な学習の時間を英会話学習【習得型学習】と現地校交流【探究型学習】とを結び付ける実践的コミュニケーション能力育成の時間と位置づけ、交流前の4時間(中学部3時間)をこれに当て、総合的な学習の時間の年間指導計画に組み入れた。

総合的な学習の時間では、交流時の学習活動に向けてグラフの描き方や考察の仕方など関連教科を発展させた学習を行ったり、学習活動で使用するポスターやクイズを作成したりする時間として授業開発・教材開発を行ってきた。また、交流時に使用する基本的な英語表現を習得するための時間としても運用することとした。(中学部においては英語科で実施)当初未確定要素が多かった実コミの時間の運用方法を明確にすることができたことは今年度の研究の大きな成果と言える。

(4) 検証授業と事後研究会の実施

今年度は、年間3回の検証授業、事後研究会を実施した。検証授業は、全て現地校交流直前の総合的な学習の時間で行い、いずれも英会話教師6～8名を現地校児童生徒と見立てた当日のリハーサルという形で実施した。授業参観者には「児童生徒がそれぞれの『段階別コミュニケーション能力の目標』と照らし合わせて達成できているかどうか」「英会話の習熟度を加味した児童生徒のグルーピングの在り方がどうか」など予め焦点化された視点を示し、交流当日の活動と合わせて参観することとした。検証授業で行ったことが交流当日にどのように生きていたかも踏まえ、事後研究会では、それぞれの視点ごとに成果と課題を割り出した。各回で出された成果と課題は、次の学年が交流の学習活動を立案する際に反映するようにした。4月から少しずつ改変を加え、全学年の学習活動を練り上げることができたことは大きな成果と言える。

(5) ICT機器活用法の模索

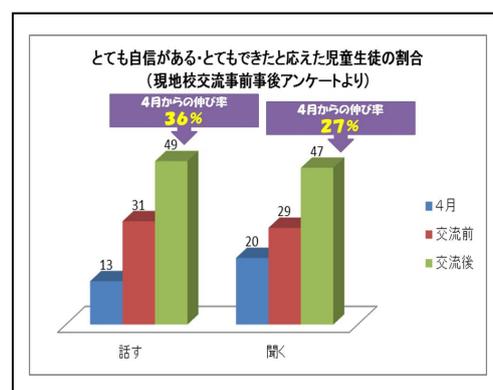
今年度前期は、実物投影機、プロジェクター、パソコンをICT機器の柱とし、当日の学習活動における発表の場面などで活用を図ってきた。また、パナソニック教育振興財団の助成金でマイクロソフト社のタブレット型端末「SURFACE RT」を購入した後期からは、この活用法も合わせて模索してきた。中学部1年の「新体力テスト」を基にした学習活動の中で、交流生徒の実技の様子を動画で撮影し、改善策を話し合う際の手立てとするなどこの機器の有用性を示すことができた。今後児童生徒の実践的コミュニケーション能力の更なる向上を目指し、このタブレット型端末の効果的な活用法を開発していきたい。



以上が、本研究において具体的に取り組んできた内容における成果である。これらの5つの取組に対しては、概ね達成できたと考えている。その根拠は、全校児童生徒から取った交流に向けての事前事後アンケートの結果から見て取れる。

このアンケートは本研究の課題である「外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力」を「話すこと」「聞くこと」の2項目に区分し、年度当初と交流日前日、交流後に「自信があるかどうか」、または「できたかどうか」を4段階で自己評価させたものである。

年度当初と交流後に取ったアンケートを見比べると、「とても自信がある」、「とてもできた」と応えた児童生徒の割合が30%近くも伸びた。この結果から、英会話に対する児童生徒の自信の向上が見てとれる。あわせて、交流を通して本研究の目指すところである外国語によるコミュニケーション能力について、児童生徒に自分自身の伸張を感じさせることができたことが1つの成果と考える。



6. 今後の課題・展望

今年度の研究の課題として、次の2つが挙げられる。

(1) 英会話学習の更なる効果的な運用方法の開発。

交流時における児童生徒の様子を観察した結果、英語表現を使って説明する際に自分の主張を述べるだけのことが多く、相手の意見を聞いて考えを練り上げるといった双方向のコミュニケーションが十分でなかったという課題が明らかとなった。実践的コミュニケーション能力の更なる向上を目指し、次年度は「聞く力」の育成に重点を置いた授業内容の工夫が求められる。

「話す力」の育成においても、さらなる向上を図るためには、より実践的なコミュニケーションとなるよう指導を継続していく必要があると感じている。交流時に児童生徒が使っている英語表現に注目すると命令口調が多く、相手にお願いしているにも関わらず丁寧さに欠けた表現が多数見受けられた。そのため「内容を伝える能力」から「気持ちを伝える能力」への意識改善が行えるよう、次年度はそのような表現を学習する単元を交流に合わせ学習するなど英会話学習や中学部における英語科の年間指導計画の見直しも求められる。

(2) 総合的な学習の時間の学習内容の再検討

今年度は中学部の担当教師の関係から国語科・社会科・体育科のみ学習内容を作成した。次年度以降のことを考え数学科や理科においても同様の学習内容を作成し、学習活動を実施していく必要がある。その際、中学部の

どの学年においても実施可能な学習内容となるよう留意する必要がある。

最後に次年度へ向けての展望として、次の視点を投げかけておきたい。

次年度は中学部の数学科・理科以外は小学部・中学部とも今年度の学習活動を踏襲する形で実施していく。その際、児童生徒の実践的コミュニケーション能力の更なる伸張を目指し、総合的な学習の時間と英会話学習がより有機的に機能するよう学習活動が作成できるよう改善していきたい。また、交流時の活動においても交流校の児童生徒とコミュニケーションを取るための時間を今年度以上に確保できるよう学習内容・学習活動の一部変更や発表物の作成にかかる時間の短縮化などの改善が求められる。

【ICT機器の導入に関わる今後の展望】

コミュニケーションを図るための時間を確保するため、学習内容の改善や活動時間の短縮が求められる。そこで、本校が来年度へ向けての取組として促進しているのが、前述のタブレット型端末の効果的な活用である。

これまでも実技教科の授業において、児童生徒の活動を動画で撮影し自分の技や動きの改善・改良のための振り返りに用いたり、国語の授業における群読の取組に使用したりと、様々な場面での活用を試みている。今後こうした実践を積み重ねることで、ICT機器の活用実践を蓄え、上記課題への改善策の一つとして活用方法を模索していきたいと考えている。

7. おわりに

本研究は2か年計画であるため、次年度に総合的な学習の時間と連動した英会話の授業の在り方等について、方向性を明らかにしたいと考えています。本校の取組が日本国内の小中学校における英語教育の発展に示唆を与えられるものとなりますように、さらに本研究を進めてまいります。

最後に、本研究を推進するに当たり、パナソニック教育振興財団の実践研究助成を通して貴重なご助言や多大なご支援を頂戴いたしました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。本書をご覧になられた皆様方には、忌憚のないご意見や感想をお寄せ戴ければ幸いです。